

## 明治末期〜大正初期の三高生活（59・8・18）

岸田 幸雄（大2一丙）

（司会者紹介） 岸田大先輩は今年九十一歳になられます。この暑いときにお願ひしましたところ、快諾いただきまして、三高会館の例会にお出でくださいました。本当にありがたい極みでございます。私から改めて大先輩のご紹介をするというのも変でございますが、先生は京都の方で、京都三中の第一回のご卒業であります。それから三高に入学されました。そして京大は法科をご卒業後、大阪商船、大阪海上火災保険に在籍されました。戦後、民選の第一回の兵庫県知事としてご当選になり、その後参議院議員にも何度かご出馬になりました。それから電源開発公団の副総裁として、赫々たるご経歴、ご業績をお挙げになりましたことは、申すまでもございません。特にこの三高同窓会といたしましては、戦後、兵庫県支部を復活するために大変なご努力を願ひまして、立派に今日のような模範的な兵庫支部を作ってくださいましたし、また初代の会長としてお

世話をいただいたのであります。現在先生のお仕事は、同和火災海上保険の相談役であります。そのほかにいろいろおありになることと存じますが、ご覧のように大変お元気でいらつしやいます。私どもの最も誇りとすべき先輩の一人でいらつしやいます。本当に今日のご遠方、暑いところをありがとうございました。

ただいまご紹介をいただいた岸田でございます。お見かけどおり、かなり老輩でございます。年齢はちようど九十一歳と六か月ぐらい、数え年で九十二歳であります。どこへ行っても年寄りのほうになっております。

母校である京都の第三高等学校を卒業いたしましたのは大正二年で、一九一三年でございますから、いまから考えてみると七十一年前に卒業しているわけです。ご列席の会員各位の中には、私が三高を出たときにはお生まれになっていない方が多数おられるのではないかと思います。それだけに非常に年のいった老輩でもあるその私が、大いに覇気満々というか、前途有望の皆さまの前でお話をしても、いささか古い話で、それこそ風化しているようなことでございますから、あまり皆さんに興味がないのではないかと考えて、先だって何か話をしろと言われたときにも、そういうことでご辞退したのであります。古い話が聞きたいのだということでもございましたので、皆さまと同じ三高の釜の飯を食った一人であり、折角のご要望であればお役に立つことも

また年寄りの一つの道楽と思つてまかり出たわけであります。

何の話をしようかということですが、考えてみるとちよつと私が三高へ入つて、三高を卒業する三年の間に、明治という偉大なる明治天皇のご時世が終わつて、新しい大正の時代になつたという境目であります。明治の末期から大正初頭の三高のことをお話申し上げることも、必ずしも無意味ではないと思つて、題を付けておいたのであります。

考えてみると、その時代にわれわれが三高精神の権化とまで言われていた折田彦市先生が、私が入学したときには校長でしたが、その後間もなく相当高年になられたということもあつて、長い三高の校長の職を勇退されて、酒井佐保という三高出身の先輩であるのですが、この方が当時の六高の校長から転任してこられました。日本の国の時代も変わるときであつたし、母校の三高もちよつと校長が変わつたという境目であつたので、その時分のことなど前に申し上げたことがありますし、皆さまもそういうことがあつたのかとお考へになると思ひまして、そんなこともお話ししようと思つて来たのであります。

手元には写真なども古いものはないのと、私は大阪と東京とに家を持っていて、大阪の家を戦災で戦争の末期に焼かれて、それがためにいろいろ古いものを焼失してしまつたのです。ただお話のついでに申し上げる参考にと思つて、二、三持つてまいりました。そのうちで、皆さま中村直勝先生にお習ひになつた方がおありかと思ひますが、中村先生は私より一年前に三高に入られ

て、私がちょうど一年に入ったときに二年生であつたわけです。一級上の先輩でもあつたというだけで、学生時代にはあまり親交はなかつたのです。

私が学校を出て社会に出ましてから、三高の同窓会のことによくお会いする機会に、中村先生ともお会いいたしました。そんなことで中村先生がいまからちょうど三十年前に、これはお茶の本でございますが、『南坊録に学ぶ』という千利休の茶道を書いた本を作られたときに、私にもわざわざ一冊送つてくれました。中村先生自筆で「花は必ず一枝」と書いて、わざわざ自分で署名して「昭和二十九年正月十四日」と書いてございます。こんな本も皆さんのご参考になるかと思つて持つてまいりました。

それから私たちの三高時代には、まだまだ古い先生がずらつと並んでおられたわけです。皆さん方の時代までおられた方もおられると思いますが、とりわけ当時私たちの時代は文科、理科ではなくて、一部、二部、三部と申しました。一部が法科と文科の予科であり、二部が工科と理科の予科で、三部が医科というふうになつていた時代であります。私は一部の、しかもその年から一部が従来は三組であつたのが、明治四十三年から、フランス法の法文学部の予科も一組できて、一部が四組になつた年であります。

そういうわけで、当時の教授諸先生も、当時から申しても当然そうですし、それも相当長く日本の学界で有名な方が多数おられたわけです。厨川白村先生、厨川辰夫という先生は英語の先生

でしたし、成瀬清先生は成瀬無極と号して、これはドイツ語の先生であったわけです。それから阪倉篤太郎先生は長く同窓会の会長もやっておられました。その阪倉先生が私のときにはドイツ語と国文のほうと両方受け持っておられたわけでございます。

それから茅野儀太郎先生は、茅野蕭々という号で、これはドイツ語の先生であった。平田元吉という先生がおられた。これは平田禿木と称して独文学の大家であった。そのように並べたてると、まことに多士済々の諸先生方ございました。

それから島文次郎、雅号は華水と称して、これも英文のほうの大家でありました。そういう時代でございましたが、ちょうど日露戦争が終わって五年ぐらい経過したときで、一応世の中が安定もし、同時に新しい時代の動きが出てきたような年格好であったわけです。

その当時からなかなか運動部のほうは盛んでして、野球部、それからボートのほうの水上部、柔道、剣道部が盛んにやっておりました。ちょうど、私が一年生の時代から、どういうわけですか弁論部というのがあったのでありますが、それを新しい傾向でやろうというようなことで、私らのクラスの連中が集まって作ったのが、縦横会という名の会でございました。その会は一部の四組からそれぞれ集まって、中には二部、三部の人も多少参加しましたけれども、主として一部の連中でやったわけです。その中で中心的に動いたのが、あとで社会大衆党の委員長にもなった麻生久君というのがいたのです。これは結局その道一本で進んだ人物でした。

そのほかに、私は一部の丙組で、丙組には棚橋小虎といって、これは長野県の出身で、これもあとで代議士に出たり、参議院議員にも出た人物です。それからもう一人、私は中学校から同級生であった山名義鶴といって、この人はいわば名門の出身で、応仁の乱の一方の旗頭であった山名宗全の末裔ということになっています。その当時は、山名家は兵庫県の但馬の村岡に山名藩があつて、その藩主であつたようです。そんな人物がたんといたわけです。

それからもう一人岸井寿郎といって、これは香川県の出身で、なかなか熱血男児であつた。そんな連中が集まり、岸井君は甲組であつたわけですが、弁論部などをやり出したりする動きがあつたのです。

これは当時としては一つの大きな事件にもなり、また麻生君などが『濁流に泳ぐ』という自己紹介のような小説を書きました。運動部のほうが中心でなかなか盛んにやっていたので、運動部中心の連中が、武断派というか会を作っていました。三高の校風を維持するためには、三高の生徒で遊廓あたりに行く学生を懲罰せねばいけないといつて、ちやうど私たちが二年生のときでしたが、三高のグラウンドで確か同級の学生だったと記憶していますが、二、三人校庭に引つ張り出して、運動部の連中が鉄拳制裁を加えたことがあるのです。これが非常に問題になって、どうもいわゆる武断派はけしからんではないかと、こともあろうに自由の校風を持って長年われわれが標榜してきた三高の校庭に、同学の友人である生徒を暴力をもって制裁するとはけしからんと、

三高の自由の校風を守るために大演説会をやらうということ、私たちが二年生のときでしたが、もういまはなくなりましたが、当時の三高本館のある南のほうに雨天体操場があつて、それが何かのときの講堂に使われるという木造の平屋の建物がありました。そこで校風擁護の大演説会をやらうということをやつたところ、それこそみんなが非常に関心を持っていたわけでありましょう。いつもは何かの会合をやるにしてもなかなか二、三十人の会員しか集まらないのに、ほとんど全校の生徒が集まつて、席もないので両方の窓にまで鈴なりになつてその演説を聞いたということがあつたのです。

そして弁論部、殊に縦横会の連中は、口をそろえて、横暴な腕力をもつて同窓に対して制裁を加えることは、三高の校風を汚すものである、どこまでも自由な態度で忠告せなければならぬということをやつたものです。満場割れるばかりの喝采であつたということがあつたのです。その事件が起つたのは、もう酒井校長の時代になつてからでした。結局学校のほうでも、林和太郎といつて名生徒監で、随分長い間生徒監の職を尽くしておられたと思いますが、この林先生もそれは見て見ぬ振りをして、そのまま過ごしたというような事件があつたのです。これは麻生久君の『濁流に泳ぐ』という小説に詳しく書いてあります。『濁流に泳ぐ』という小説は、一時非常に有名になつたので皆さんも読まれたことがあるかもしれません。

これは前後しますが、私が入学したときに、昨今大学の入学生で、現在の高等学校の成績の優

秀な者は無試験で入れるという制度が始まったようですが、ちょうど私の年から、各高等学校で無試験入学という制度が始まりました。出身中学校の校長の推薦で、成績の優秀な者は無試験で入学できるという制度が始まりました。ちょうど私の母校は、京都の府立のいまは山城高等学校と言っています。その前身で、府立三中という名前が長く通っていましたが、当時は京都の中学校はみんな創立した順で、府立の一中と二中が京都市にあつて、三中が福知山市にあつて、また四中が宮津にありました。それでも明治四十年ごろ生徒が増えて、一中は分校が本校のほかに京都府庁の裏にありまして、そこに三年まで京都市の烏丸通りから西の者は分校に通学するということになって、四年生からは吉田の本校に行くということになっていたので、その分校の者だけが花園に第五中学校として出発したわけです。私たちは第五中学校の第一回の卒業生ということになったのです。

その後知事が変りまして、大正十年ごろだったと思いますが、校名を改めて、つまり京都府立の京都一中京都府立の京都二中。そうなると五中は京都市内の三番目になるから京都府立の京都三中ということ、長く終戦後まで来たわけです。福知山のほうは府立福知山中学校、また四中は京都府立宮津中学校ということに名前が変わったようなこととあります。これはどちらでもいいことかもしれませんが、ついでに申し上げたわけです。

そういうわけで、私たちは第一回の卒業生でもありますから、先輩の卒業生もないし、当時の



校長は中野省吾といって、分校の主任教師であった先生が、そのまま京都府立五中の初代の校長先生になられたわけです。中野校長が推薦してやろうということで、私なども無試験の推薦をしてもらったところが、たまたま三高の入学のときには折田校長が直接推薦の生徒だけを面接して、私たちも合格して入学したので、当時は随分無試験入学者がいたのです。

ところがどうも入学してから、中にはほとんど成績が伸びない人もある。それこそ当時は注意点といつて、非常に成績の悪い者は留年というか、一年留まるやつですが、落第させられる注意点を受ける生徒がたんといたということです。三年ぐらいまでは優秀な生徒がりましたが、四年目からは一高と三高がまずやめて、あとの高等学校もまた全部廃止してしまったということであります。そういうわけで、私自身も折田校長にも、ほんの短い時間ですが直接校長先生からいろいろと話を聞いたということと印象に残っています。ちょうど私と同じクラスの中にはそのまま京都大学に残って民法の教授を長くやって、例の滝川事件で辞めてからは立命館大学の校長をやった末川博君がいたのです。末川君はちょうど一年生で病気になって、一年だけ途中で休学して、三高の卒業は私より一年遅れていたのです。そういうこともあったのです。それだけに折田校長先生に対しては、私個人としても深い印象が残っております。

その折田校長先生の銅像が、いまも三高、京都大学の教養学部に残っているのが、懐かしい思い出になるのでございます。近ごろの教養学部の姿は、全く昔の三高の面影がなくて、落漠たる

感が深いのであります。そういうわけで、折田校長先生の時代が去ったのです。

ところが、鉄拳制裁の問題などで、一時問題になったわけですが、これも一つの思い出になるので申し上げますが、ちょうど私たちが二年、明治四十三年に入学いたしました十四年が済んで、当時は高等学校は毎年九月に入学して、翌年の七月までが一学年になっていたものですから、ちょうど四十五年の八月、三高の二年から三年に上がるときに、明治天皇が崩御になったわけです。それこそ偉大なる明治の時代がいよいよ終わったというようなことで、若いながらも感慨深いものがあつたのです。ちょうどその当時、野々村戒三先生といひまして、これは私の中学時代には京都の五中の教頭をやっておられて、私たちが二年生になったころに三高のほうへ栄転されました。元来西洋史専門の先生であつたのですが、私たちの時代には西洋史には中村善太郎という先生がおられたものですから、中村先生と並んで確か西洋史の講義をしておられたと思います。それ以外に、当時高等学校には教務主任といつて直接教育のほうの主任の教授と、庶務主任といひますか、教育関係以外の、いわゆる庶務のほうの主任と両方の担当の教授があつたのです。野々村戒三先生は庶務のほうの主任教授をしておられました。そういうわけで野々村戒三さんは中学時代からの恩師でもあつたので、よく家庭も訪問して、いろいろお話を聞いたこともあるのです。ちょうど明治天皇が亡くなった直後でしたが、野々村さんをお訪ねしたとき話されたことで、いまなお印象が残っていることがあります。「とにかく天皇が亡くなって、

いわゆる御世代わりといいますが、時代が代わるということは、非常に国民の精神にも大きな影響を与えるものだよ」ということを言われました。これも皆さんご体験の方があると思いますが、諒聞といまして、天皇が崩御になると一年間は国民がみんな喪に服するということであつたのです。明治天皇の崩御のとき、ご葬式のときには、いわゆるご大葬と称して全国民が喪に服することになっていました。

酒井佐保校長はどちらかというと理科系統の先生であつたからでございましょうか、折田校長のやり方で、高等学校の生徒は中学校を卒業したのだから、一人前の青年として自由に振舞つてよろしい、それだけに責任を持たなければいけないと、いわば自由主義といいますが、放任とまではないかと思いますが、全く無干渉主義であつた折田校長のやり方と違って、いささか干渉的に出られるということが、三高の生徒全体に不快な感じを持たせておりました。

ところが大正の時代になって、明治四十五年が大正元年で、その年はちょうどあとの五か月ばかりが大正元年であつた。それから翌年の大正二年にご大典になつたと思うのです。そのときに確か西園寺内閣が、ちょうど西園寺公望公という華族の出身の政治家が、政友会の総裁として初めて、いわゆる政友会内閣というものを作られたのです。当時はすでに相当軍部のほうが強かつたのでしよう。陸軍の二個師団増設という問題が起こりまして、それで西園寺内閣はとうとう内閣を投げ出して、その次に桂陸軍大将が総理になって桂内閣ができたのです。

一方で、それに対して国会議員のほうでは犬養木堂、犬養毅というご承知の人、尾崎行雄、尾崎号堂、この木号二堂の率いる憲政擁護運動というものが盛んに行われました。ちようど大正二年の初めのころです。京都にもそういう政治家が来て、大いに桂内閣の攻撃をやった。演説会を開いて盛会だった。そのときにも、もちろん三高の学生も大勢行っていたようであります。その仲間の連中について、円山公園までデモ行進をやって、その一派がいわゆる桂内閣擁護派の政治家の家を襲撃して焼き打ちをしたという事件があったのです。

これが非常に問題になって、相当、警察に留置された事件が起こったのです。たまたま三高の学生が制帽をかぶって来ていたということで、翌日川端警察署から、三高の寄宿舎へ警官がやってきて、ちようどその演説会があつて暴動が起こった時間に、寄宿舎の生徒で外出していた者の名前を調べていった。その連中を、寄宿舎のほうでも報告したところが、全部警察が呼んで、川端警察署で一晩留置して、いろいろ暴動に参加したか参加しなかったかというようなことを盛んに調べあげた、という事件が起こったのです。

そこでわれわれ弁論部の学生としては、当時の学校当局のやり方はけしからんではないか、学校は生徒を自分の子弟として大いにかばねばいけないのに、いたずらに警察の言うままに名前を報告したのだから、警官の前にそういう連中が引つ張り出されて、一晩留められた。酒井校長のやり方は甚だけしからんから、ひとつ生徒大会をやるうではないかということになりました。

この生徒大会を三高の講堂、雨天体操場で開いたときも、ほとんど全生徒が集まった。それで酒井校長も「それなら私も行って釈明するから」と言っ、その会合に出てこられた。「あのときは、実は学校としても全く気がつかなかったが、他意はなかったのだ。ただ警察からそういう調べがあったので、その当時の外出者の名前だけを知らせてやったら、それがそういうことで警察に呼び出されたわけで、関係者に対しては学校としても気の毒に思っている。しかし他意はなかったのだから、あしからず了承してくれ」というような、極めて淡泊な挨拶があったものですから、生徒大会のほうでも「校長がああいうならしうがないではないか。これ以上校長を責めるわけにもいかなないではないか」ということで、この問題はすっかり済んでしまったということもございました。

そういうことがあったわれわれの三高生活の時代です。おそらくこれは、その当時としては一つの事件として話題になったわけです。いま申しました連中が、一時は三高がこういうふうな校長のやり方なら、われわれもむしろ私学の自由な学校に行こうではないかということまで申し合わせをしたこともあったのです。そういうことで三高の三年間が終わって、京都に家のある者は割合京都大学に行きましたが、その他の麻生久君とか、棚橋小虎君とか、山名君は京都に家があったのに、そのグループと一緒に東京に行きました。そんなことで三高の生活は済んだわけですが、一方で、運動部は当時から学生会という生徒がいくらか会費を出して、学生のいろいろな運動

なり事業をやる会の仕組みができていたのですが、その学生会の予算の取り方を、運動部を中心として取って、弁論部や雑誌部というのもできていましたが、ほんの一部しかなかった。それに對して弁論部あたりは非常に強く主張して、私たちの時代に相当予算を増やしてもらったということもあつたのであります。

もう一つ、これも一つの話題になると思いますが、ちょうど私たちが二年のときに、私たちの仲間の中で行宗君というのが、高知県の出身の者であつたのですが、それが東京の一高のほうの弁論部の世話をしていた岡上守道という、これは学校を出てから黒田レイジというペンネームで朝日か毎日の記者で、相当ジャーナリストとして活動した人ですが、その岡上君と個人的に話をして、当時から一高と三高は野球の試合を毎年やっていたのですが、ちょうど私たちが二年のときにその機会に文化方面も、大いに両方の交歓というか、演説会をやつて、一高の文化と三高の文化の交流をやるうではないか、というふうなことができました。それで結局、そのときはちょうど三高が東京へ行って一高と試合をするときであつたので、三高の弁論部が三名ほど出かけていて、一高の学生のほうからも三名ばかり出席して、当時一高には嚶鳴堂オウメイという名前の古い講堂があつて、そこで演説会をやりました。それが発端となつて、相当長い期間一高、三高連合の演説会をやつていたようです。

ちょうどそのとき私は三高の弁論部の一員として出席いたしましたして、演説をした記憶があるの

でございます。私がやった演説が、当時相当長い期間出ていた『雄弁』という月刊雑誌がありまして、それに演説の内容が載せられて、それがどういう因縁ですか、『青年雄弁集』という本ができたときにも、載っていた記憶があるのです。そういうこともありまして。

いずれにいたしましても、皆さんは相当のご年配ですが、いまの若い高等学校の生徒や大学の生徒が聞いても、あまりにも時代がかけ離れていて、面白い話でないかもしれません。そういう時代をいまから考えてみると、それこそ夢の多かった、またそれだけに平和な安定した時代であった。ところが一方で、いわゆる大正デモクラシーという動きがぼちぼち動き始めていた関係で、先刻申しました連中の大部分が、みんないわゆる新しいデモクラシーの運動に参加したということになるわけです。

ちょうどいまから七十年も前の話ですから、当時の三高の一部、文科系統の学生はたかだか百四、五十人であったのですが、その中で学校を卒業してから国会議員の経験を持った者がたくさんいたのです。麻生久をはじめ、棚橋小虎、岸井寿郎、それから山名君はちょうど終戦の直後に男爵議員で、貴族院議員でした。もう一人松永義雄といって、これは京都大学の庶務のほうの課長をしている人の息子で、三高の同級生でしたが、これもまた大学を卒業してからそういう方面に興味を持ちまして、これも終戦後でしたが、一時参議院議員に出て、政務次官などに出たことがあったと思います。

私もたまたま終戦の混乱期に、ちようど大学を出るときに大阪商船に入社する話が決まっていたのですが、ちようど同窓の一人である川崎末五郎という、これは鹿児島の高等農林学校から、京都大学の専科へ行つて、それから本科を卒業した人です。それから大村清一といつて、これも鹿児島の高等農林学校を同期に出て、大村君は一年遅れて大学に行きまして、それでやはり京都大学の専科へ来て本科を出た。その川崎末五郎君が内務省へ入るので、当時は役人になるためにはいわゆる高等文官試験というものがありまして、外交科と行政科と両方あつて、高文の試験といつています。「自分が高文の試験を受けるから、君もひとつ受けたらどうや」と言うから、私は民間の会社へ入ることに決まっていますのでそんなものは受ける必要がないのだと言つた。「まあ、ついでに付き合えよ」ということで「そんなら受けておくか」と言つて受けたのです。

その川崎末五郎君は、内務省で割に早く知事までやりましたけれども、戦前はいまと違つて同じ保守系であつて、政友会と、民政党、憲政会から民政党に名前が変わつたと思いますが、その両方の政党がかわりばんこに内閣をやるということが、大正の末期から昭和にかけて行われる時代であつたので、ちようど川崎君の養父の川崎安之助先生もちようど京都府から代議士に出ている関係で、知事を辞めてから代議士に出ている、終戦の直後に内務政務次官をやっていました。

大村清一君も、ちようど内務省へ入つて、あちこちの知事をやつて、それから一時辞めて、また終戦の直後に内務事務次官をやつていて、この両君が、戦争中の知事の大部分は、敗戦の結果



戦争協力者ということで、公職追放させられた関係があるもので、そのあとの補充に、内務省系統だけではどうしても人がいないからということで、いろいろほかの省のしかるべき局長や相当地位にいる者を知事に任命する、民間からも任命する例を開いたときに、私も是非出ると勧められて、出たのが兵庫県の知事になった発端であります。

世の中の回り合わせというのは妙なもので、いろいろな因縁がまつわって変わっていくわけ、ご列席の各位も相当のご年配ですから、いろいろな生活をしてこられていると思います。それにして、こうやっていま世界が大きく動く時代ではありませんが、とにかく日本はいわゆる戦争を放棄して、経済大国になって、すでに敗戦後まさに四十年という歲月、日本としては原爆でえらい目にありましたけれども、そのあとは安定して、そして原爆であそこまで破壊された日本が、今日こうやって発展してきているということについては、何としても安定感というものがあると思います。

ちょうど私が今朝テレビを見ていると、林田悠紀夫君が京都の市のほうで神社仏閣から税金を取るということで、そういう反対の代表者の陳情を受けて、自治省と相談するということで、対面の場を見まして思い出したのです。林田君は、私からいうと二十六年後輩になるのです。私は大正二年に三高を出ています。林田君は昭和十一年に確か三高を出ているはずなのです。実は昭和十年に弁論部だけの部史を作った。これは私らもだいぶ協力してやったのです。これにも林

田君が弁論部員として名前が出ているのです。私は参議院に二期出ていましたが、一期目の終わりのころに、林田君も農林省を辞めて、参議院で三年ほど一緒になっていたこともあるのです。話が弁論部に偏ったことになりましたが、いろいろなことがあったことを思うと同時に、時代の変化というところをつくづく考えます。

それと、こういうことも言えると思うのです。日本は単一民族の単一国家だと。これは世界にはほとんど例がないのだと、まさにそういうことで、それだけに民族意識というものが強いのもかもしれません。さて、いまの若い人たちになると、国家観念というものが、われわれほど強くないような気がします。もちろん国家観念がないからといって、無政府主義とか共産主義になるわけではなくて、もちろん自分の生まれた国に対する認識は深いだろうが、戦前にそういう教育を受けたわれわれほど、国家観念ということが、別の形ではあっても、浸透していなような気がすると同時に、それがやはり時代の変化だということをも十分われわれは認識せねばならないと思います。

いずれにしても、私らの年配になりますと、何といっても九十歳を超えますと、全くの老輩であって、体力も相当衰えています。しかしそれなりに、生きるという意欲は持たねばいけないのであり、これがあることによって、われわれは相当時代の動きもひしひしと肌を感じる事ができるし、またそれによってこれからの日本、これからの世界に対する一つの自分流のおもわ

くも持っていくことができるのではないかと思います。

久方ぶりで皆さんとお会いいたしますと、甚だ古い、世迷い言を申し上げたかもしれませんが、これも同窓のよしみで、自分たちと同じ三高の古い卒業生には、ああいうものの考え方をする年寄りもいるのだということをご了承願いたいと思います。いろいろお話しするときに、いろいろお話しするときに、いろいろなことと今日のお話の責ふさぎにいたしたいと思えます。どうもありがとうございます。

(司会者) ありがとうございます。先生は大正二年のご卒業であります。そうすると私(日比野丈夫)はまだ生まれていないのです。母親の腹の中にちよつと一点を留めていたような時代でございます。お話は大変神代のことのようなお話かと思っておりますが、決してそうではありませんで、先生のすばらしいご記憶力によりまして、三高を中心とした、そのころの日本の生きた歴史をまざまざと、大変印象的なお話を伺うことができました。こんなうれしいことはありません。ますますお元気で、この続きでもお話いただけるようなことになれば、大変うれしいと思えます。最初に中村直勝先生のことからお話いただきましたが、私は偶然にも中村先生が現職で亡くなられた大手前女子大学というところのあとをいま継がせてもらっております。その学長を勤めていたわけです。さて、敬老の日と申しますと、先生が兵庫県のおいでになりました

ときに、思想がこのごろややこしいので、大いに敬老ということを大事にしななければならないと言つて、参議院議員にお出になりました、すぐにそれを日本中の敬老の日にもつていかれた。敬老の日といいますと、先生を思い出していかなければならないということを知っています。

敬老の日というのは、老人の日という名前で、昭和二十五年に私が思いついてやったのです。そのときはちょうど終戦直後でしたから、昔の大祭日もなくなって、国民の祝日に関する法律というのが昭和二十三年に出ました。子供の日とか、成人の日とかが祝日で休みになるのです。それで占領行政の時代だから、アメリカの軍人が来て、盛んに母の日をやり出したのです。五月第一の日曜日は母の日だといつて、生きているお母さんには赤いカーネーションを贈る。また亡くなった母に対しては白のカーネーションを贈つて、母に感謝する。そういうことを日本人がどんどん真似しました。

それはいいことだけれども、どうも日本は昔から、いわゆる東洋思想として<sup>ヨライ</sup>齢を尊んで、老人を大事にするということが、日本の一つの国民精神なのだ。年寄りを何とかしようではないかというので、兵庫県で部長会議にかけて相談して、やろうということ、九月十五日というのは兵庫県で作ったのです。ちょうど九月はいちばん時候もいいし、一日は関東震災のあった日です。月末は忙しいから中をとつて九月十五日ということをやった。

そのときはまだ敗戦後で、県も各市町村も相当財政難であつて、大したことはできませんが、とにかく県内の最高年齢者に知事から何かお土産を贈ろう、また各市町村の最高齢者は市町村長が慰問に行つてくれと、余力があれば養老院を作るとか、あるいは老人病院を作つてもらいたい、ということとそれを県内の各市町村に協力がたがた大いに要望したところが、その時分は何といひましても敗戦後日が浅く、戦前の形が残つていたせいですが、県の言うことは各市町村がもなく聞いてくれたわけです。

それで大変なごやかな空気になったものだから、これはひとつ全国的にやってもらおうというので、厚生省へ進言して、兵庫県でこういうことをやったが、ほかの県でもやってもらつたらどうか、と厚生省に言ったところ、厚生省もそれはいいことだからということで、各県に通達しました。どこもみんな翌年からやったらいい。翌年か翌々年ですか、私は東京で偶然岡田さんといつて、衆議院議長もやり、戦争中には厚生大臣もやった人ですが、その岡田さんが私の顔を見るなり「岸田君、君は兵庫県でいいことをやってくれたよ」と。「何ですか」と聞いたところが「君のところでは老人の日を始めたものだから、今年から東京都の知事から慰問品をもらえた。年寄りにはああいうふうにしてもらつと、心が温まるものだよ」ということを言われたことをいまだに記憶しているのです。

昭和三十八年、私はちょうど参議院に出ているころ、老人福祉法という法律ができた。その法

律の中にも、九月十五日を老人の日とするという規定ができたわけです。昭和四十一年になって、初めて九月十五日が祝日になった。当時は体育の日も休みにしなければいけないとか、例のやかましい建国記念の日、昔の紀元節ですが、これなども祝日にすべきではないかという議論が出ていた際に、ちょうどそのときに体育の日と、建国記念の日と、老人の日は敬老の日と名前を変えたのです。とにかくそういうことになって、兵庫県では昭和四十一年の九月十五日に、いまも健在ですが、私のあとの知事の金井元彦君が、わざわざ敬老の日制定記念……を作りました、私に感謝状をくれたのです。「あなたが兵庫県の知事に在職中に、全国の都道府県に先駆けて老人の日を決めて、いわゆる敬老思想、老人福祉に大いに協力されたので、その功績に対して感謝する」と、感謝状をくれたのです。

そのことを、三高の会報にもその後一、二年経ってから書いたことがあるのです。その関係で私の古い友人が「君のおかげでぼくも九月十五日に知事から何か金一封もらえようになつたよ」という冗談話を言う人もあつたわけです。私自身も、年々今日まで相当頂きました。あれは七十五歳からですから……

(元兵庫県知事・  
元参議院議員)